

# 福島民友新聞『マイストーリー』

AML植物研究所副社長 菅野直和

2024年3月11日～23日掲載（日曜、休刊日除く）

## 世界を平和にする農業

AML植物研究所副社長 菅野 直和 (41) ①



AML植物研究所で働く私。1年前までは農業とは無縁の人生だった

福島県から農業で世界を平和に！。これはAML植物研究所という植物工場の副社長を務める私の目標だ。昨年2月に入社するまで、農業とは無縁の人生だった。今から16年前、私は皆さんが思い浮かべる「平和」とはかけ離れた場所にいた。25歳から2年間、紛争が続くスリランカの非政府組織(NGO)で研究員として紛争予防に取り組んだ。

当時の私の日常はこうだ。突然、自宅の明かりが消え、辺りが真っ暗になる。外では「ドドドド」という日本では聞き慣れない音が鳴り響く。発電所を狙って爆弾を落とされた反政府武装勢力LTTEの航空機を自がけて、スリランカ軍が対空砲を撃ったのだ。自宅付近では爆破テロがよく起こり、街に落ちていくのを見ては「爆弾ではないか」とおびえた。当時はこれが当たり前の日常だったが、今振り返ると正常な精神状態ではなかったと思う。そんな日々を送っていた私は現在、喜多方市で「朝ラーメン」を業しんでいる。人生何が起きるか分からない。

7年間勤めた外務省を昨年1月に退職し、その1カ月後に入社したのが喜多方市のAML植物研究所だ。ここでは完全閉鎖型のクリーンルーム内で、太陽光の代わりに発光ダイオード(LED)を、土の代わりに培養液を使い、低カリウムで高カルシウム、高ポリフェノールレタスといった高機能性野菜を育てている。もちろん農業は使っていない。首都圏の有名百貨店でも販売されていて、健康志向の消費者から注目を集めている。

従来の農業は天候に左右されるため、生産も価格も不安定で、広大な土地と大量の水がなければ成り立たない。しかしAMLの技術を使えば、これらの課題を解決し、冒頭に紹介した私の目標を達成できると確信している。

紛争・平和学博士号を持つ私がなぜ喜多方市で最先端農業に取り組んでいるのか。「平和の探求」という信念に基づいて歩んできた人生の一端を紹介したい。

(聞き手 阿部二千翔)

かんの・たかす 伊達市出身。英ブラッドフォード大紛争解決修士課程修了。英キングスカレッジロンドンで紛争・平和学博士号を取得。外務省に入省し、ウガンダ、ボツワナ両国日本大使館、ロサンゼルス総領事館に勤務。退職後、昨年2月にAML植物研究所に入社した。NPO法人ルワンダの教育を考える会(福島市)の戦略アドバイザーも務める。

## 幼少期から海外に興味

で聞くと、母親が「み箱からはがきを見つけ、応募してくれたそうだ。初めて経験する世界の子ともたちの交流は楽しく、とても刺激的だった。まさかこの時、30年後にサンディエゴ市を管轄する在ロサンゼルス総領事館に勤務することになるとは夢にも思わなかった。霊山中では野球部に所属。どちらかというと勉強よりも野球に打ち込んだ中学校生活だった。福島高に進学し、進路を考える時期になっても自分が何をしたいのかわからず、数少ない「文転」した組の一人で、迷走していた。それでも漠然と「海外で活躍したい」という思いがあった。小学5、6年生の時に英会話を習わせてもらったり、両親に小学校から高校まで毎年冬休みに豪州や米国、韓国などさまざまな国に連れて行ってもらったりしたことが影響しているのは間違いないだろう。好奇心旺盛な私にとって海外は刺激的で新鮮だった。新しい土地に慣れるのが早く、許容範囲が広いという性格は子どもの頃に形成されたものだと思う。(聞き手 阿部 二千翔)



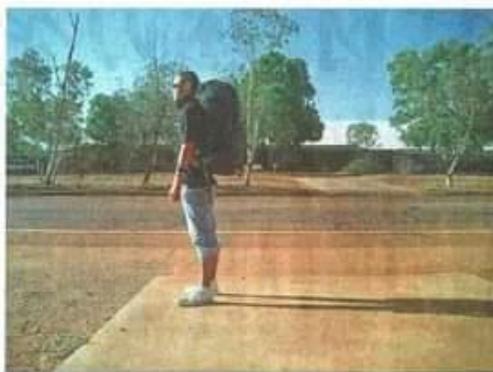
わんぱくだった幼少期の私。隣の妹は現在、医師として活躍している。

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 2

海外で働くまでのレールを敷いてくれた両親には、感謝してもしきれない。私は伊達市霊山町で生まれた。県立高校教諭の父と洋裁学校講師の母、1歳下の妹の4人暮らし。今思えば、教育熱心な両親から数え切れないほどのチャンスを与えてもらった。幼い頃の将来の夢は、月並みだがプロ野球選手だった。リトルリーグとフットボールチームを掛け持ちしていた小学校5年生の時に、野球の本場・米国で世界中の子ともたちと野球をする機会を与えてくれたのも母親だった。参加のきっかけは、新聞で見た「世界少年野球推進財団(WCBF)が米サンディエゴ市で野球教室を開く」という募集記事。「本場で野球ができるのでは」と淡い期待を抱き、はがきが必要事項を記入したのだが、「どうせ受からないだろう」と諦めの気持ちのほろが勝り、くちやくちやく丸めて「み箱」に捨てた。しかし後日、自宅に合格通知が届いた。後

## 留学経験 成長した自分

っかけとなった。大学3年の2月から1年間は、宇都宮大の提携校のオーストラリア・メルボルンのビクトリア大に留学した。前半の半年は語学学校に通い、後半は現地の大学生と一緒に英語で授業を受けた。留学前は拙かった英語も、帰国後はTOEICで930点を取るほどまでに上達した。英語がある程度できるようになったことは自分の中で自信につながった。留学経験は、自分の性格をも変えた。元々は田舎者でシャイな性格だったが、1年間でより積極的な性格へと変わった。海外の大学で生きていくためには、自分の殻を破るしかなかったという方が近いかもしれない。「将来、国連や非政府組織(NGO)で紛争解決の仕事に携わりたい」。そんな思いを抱き始めた私は、卒業後は就職せず、当時世界最大の平和研究機関といわれていた英ブラッドフォード大で平和学を究めることにした。(聞き手 阿部 二千翔)



大きなバックパックを背負い、オーストラリアに留学した私。1年間で人間的にも成長した

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 3

大学での経験が私を「紛争解決」の研究分野へと導いてくれた。宇都宮大国際学部1年の時に幼い頃からためていたお小遣いを片手に、アイルランド・ダブリンに約1カ月間、語学研修に行った。一人で渡航したのはこの時が初めてだった。行き先にアイルランドを選択した理由は二つ。一つは英語力を磨きたかったから。もう一つは、周りの仲間が選ばないような国に行ってみてみたいという、何となくの理由だ。研修中、1960年代後半から約30年間紛争が起きていた北アイルランドを訪問したことで人生が変わった。そこで目の当たりにしたのは、テロ組織を礼賛するような壁画や爆破テロの爪痕が残る街並みなど、衝撃だった。紛争地に初めて足を踏み入れた率直な気持ち「怖い」だ。私が訪れた時は既にかつてのような暴力的な紛争は終結していたが、自分があるこの場所です、爆破が起きるのではないかと恐怖を感じるほどだった。この時に受けた衝撃が、後に紛争解決の道に進むき

## 「紛争は悪だと思おうか」

中で最も印象に残っている。修士課程中に参加したスリランカスタディーツアーでは、その後の人生を左右する出会いがあった。当時、シンハラ人とタミル人の間で続いていた紛争をコミュニティレベルで拡大予防する非政府組織（NGO）を訪問した。長年紛争を続けてきた地域では民族間の不信感が募っており、個人間の単なるけんかが民族間の暴力に発展してしまうケースもある。このNGOはこういった予兆を察知した時点で介入し、地域や宗教の指導者らとの対話の場を設けて、民族間の大きな暴力にならないようにする活動をしてきた。

皆さんはどうだろう。嫌いな相手がいいたら、自分の中で悪いイメージを膨らませていないだろうか。対話は相手への気付きや共感を生む。相手が嫌いなのであれば、対話したほうがいい。たし、のしり合いではだめだ。できれば中立的な第三者がいたほうがいい。紛争解決の分野で学んだことは、私たちの生活に生きることも多い。（聞き手 阿部 千翔）



英ブラッドフォード大平和学部紛争解決修士課程で修士号を取得した私（前列左から4人目）。世界各国から集まった仲間と共に平和について学んだ

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) ④

「紛争は悪だと思おうか」。これは英ブラッドフォード大の最初の講義で、教授から投げかけられた問いだ。皆さんならどう考えるだろうか。

教授は「紛争解決の分野では、紛争は暴力的でない限り、必ずしも悪ではない」と続けた。「紛争」（英語で conflict）という言語間のニュアンスの違いはあるかもしれないが、意表を突かれた。平和学では「社会に問題があるのなら、世の中をよくするためにある程度戦わなければいけないから、紛争は必要」と考えるのだ。

さらに極端な話をすると、紛争を解決するためにには全員を殺すという方法もあるが、これでは誰も納得しないし、全てが破壊されてしまう。紛争は誰もが、自分たちの平和が欲しくて始める。だから、平和学では平和を単なる目的にするのではなく、平和的な手段によって平和をもたらすことを原則とする。「対話で問題を解決する」。これは平和学の基本中の基本の考え方だが、修士課程での学びの

## 紛争解決へ現地で奮闘

た紛争が終結する歴史的瞬間に立ち会った。長く続いた紛争は、スリランカ政府軍が軍事作戦で多くの死者を出しつつも終結させた。対話による紛争予防をしていた私たち、そして幾度にもわたり仲介に当たってきた国際社会にとっては、とても複雑だった。

紛争中のスリランカで感じたことは、紛争地域にも日常生活があり、私たちと同じように楽しいことやうれしいこともあるということだ。必ずしも「紛争地域イコール悲しい国」ではない。一方で、紛争中に生まれた人など、平和な社会というものを知らない人たちが多数いることも事実だ。

当時の月給は3000ル。日本円で4万5千円ほど。一軒家の一部屋を1000ルで借り、2年間水シャワーで過ごした。自宅近くで爆破テロが起きるなど、とても過酷な状況だったが、日本に帰りたいと思ったことは一度もなかった。あの頃は20代半ば。「世界で頻発する紛争の解決に貢献したい」という意気込みがあった。（聞き手 阿部 千翔）



所属していたNGOが主催した非暴力キャンペーンに参加する私（左から2人目）。紛争地域での生活は過酷だったが、充実感があった

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) ⑤

私は数少ない紛争を経験した日本人だ。「紛争解決の実務経験を積みたい」。そう考えた私は修士課程修了後、スリランカスタディーツアーで訪れた紛争予防に取り組む非政府組織（NGO）に自ら志願し、2年間働かせてもらった。日本人は私一人だけ。任せられたのは、研究員という情報収集・分析係だ。スリランカ紛争に関する情報を収集・分析し、NGO代表で紛争予防の世界的権威クマール・ルペシンガ博士に報告する役割を担った。

活動の一環で訪れた国内避難民キャンプでは、難民に対するイメージを覆すような出来事があった。難民という、テレビに映し出される「弱者で助けを求めた人々」というような固定観念があったが、そこには英語とフランス語の2カ国語を操る難民の女性がいる、思わずはっとした。難民という言葉とイメージだけでひとくくりにしていた自分が恥ずかしくなった。

勤務2年目の2009年には、26年間続い

## 研究励む中 起きた震災

研究が手につかない時期を乗り越え、当初からの目標だった4年間で論文を書き上げることができた。論文のテーマは「批判的紛争の早期警報」紛争の早期警報の研究と実践を再構築する」。スリランカでお世話になったNGOのコミュニティレベルでの紛争の早期警報・早期介入を新しい形の紛争予防と捉え、可能性と限界について考察した。

キングスカレッジロンドンで紛争・平和学博士号を取得できたことは、私の自信の源になっている。(聞き手 阿部 千翔)

震災と原発事故後、「福島出身」と言うだけで現地の人に「大丈夫なのか」と心配されるほど、福島は世界的に知られるようになった。「福島のために何かできないか」。こんな思いが芽生えたのは、未曾有の災害を日本で経験していないという負い目からだと思う。逆に言うと、震災当時海外にいたからこそ、今は福島で農業をしている。震災は海外にいる私にも大きな影響を与える出来事だった。



タワーブリッジの前で「がんばれ！福島」と書いた紙を掲げる私。固ても立ってもいられず、地元福島に交流サイト(SNS)を通じて応援メッセージを届けた

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 6

紛争予防に取り組むスリランカの非政府組織(NGO)で2年間働いた経験を生かし、28歳からは英キングスカレッジロンドン戦争学部博士課程で紛争予防の学びを深めた。

研究に追われる日々を送る中、東日本大震災が発生した。現地時間の2011年3月11日午前8時ごろ、ロンドンはいつも通りの朝だった。起きてBBCニュースを見ると、街をのみ込む津波の映像が映し出された。すぐに地元でとんでもないことが起きたと悟った。実家のある伊達市霊山町は沿岸部から離れた山奥で「津波の被害はないだろう」と思ったが、東京電力福島第一原発事故の影響が心配だった。家族と連絡を取ろうとしてもつながるはずがなく、不安だけが募っていった。

日本から遠く離れた英国でも24時間体制で災害情報が報道されており、被害の甚大さを実感した。2、3日は研究が手につかず、テレビの前でたまたま震災関連のニュースを追いかけることしかできなかった。家族と連絡が取れたのは約1週間後。とても安心した。

## アフリカで受けた感謝

18年からは、省内公費で志願したボツワナ日本国大使館に配属された。ボツワナは戦争を一度も経験していない、アフリカでは珍しい平和な民主国家だ。ダイヤモンドを産出する中高所得国のため、無償資金協力の援助対象ではなく、日本食や酒、工芸品などの日本文化を伝える仕事を中心だった。東京電力福島第一原発事故の処理水放出の安全性を現地の環境大臣に説明したこともあった。

ボツワナに来て1年が過ぎたころ、世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るい、在留邦人を帰国させる対応に追われた。ワクチンの接種は先進国と比べてだいぶ遅く、私も日本から半年遅れての接種となった。その間に知人が次々となくなり、医療が充実していないアフリカの実情を思い知った。

計7年半過ごしたアフリカは大自然が美しく、人は気さくに接してくれて、すっかりアフリカのとりこになった。アフリカとの縁は今でも続いている。(聞き手 阿部 千翔)



ウガンダのムセベニ大統領と握手を交わす私。ウガンダでの仕事は成果が目に見え、とてもやりがいがあった

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 7

博士課程修了後、2014年に結婚し、人生の転機を迎えた。収入面で安定し、国際協力に貢献できる外務省入省を見据え、在ウガンダ日本国大使館の「草の根人間の安全保障無償資金協力」の委嘱員となった。

15年、33歳の時に外務省の経験者採用試験を受験し、明れて一発合格。最初の勤務地は在ウガンダ日本国大使館だった。狭い国の一つに数えられるウガンダでは、経済協力班長として主にインフラ整備事業に携わった。物流の生命線となるナイル川に橋をかける工事のほか、病院や学校の建設事業などを担当。国連機関と連携し、南スーダン難民支援にも当たった。

最も印象に残っているのは、分娩室の完成を祝う式典での出来事だ。あるウガンダ人の女性に「(完成を祝って)きょう生まれた自分の子とともに『カンノ』と名付けた」と告げられた。まさかと思ったが、本当だった。これは一例に過ぎないが、ほかにもウガンダでは自分の仕事によって多くの人が喜ぶ顔が見

## 「自分らしさ」取り戻す

任した先々で無我夢中で仕事に取り組み、たら、気付けば外務省入省から7年が過ぎていた。外務省での仕事はどれもやりがいがあり、周囲から一定の評価も受けていたが、ふと「自分らしさ」が失われていることに気付いた。元々は新しい発想を生み出すことを得意としていたが、外務省という大きな組織の中では一つの歯車として個性を発揮することは難しかった。

「今こそ福島のために自分が何かできることがあるのではないか」。離婚して自由の身となったこともあり、一度立ち止まって今後の人生を考え直した。その時に思い浮かんだのが、家業でもある「農業」だった。

農業の「3K」は「きつい、汚い、危険」と言われるときがあるが「格好いい、きれいな高収入」の「3K」を掲げ、福島で起業しようと考えた。「外務省を辞めるなら日本の農業を変えてやる」。40歳の節目に、周りに引き留められながらも外務省を退職し、16年ぶりに古里・福島に帰ってきた。

(聞き手 阿部 千翔)



イベントで日本文化を紹介する私企。ロサンゼルスで出会った福島ゆかりの日系人とは今でも交流が続いている

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 8

2021年11月、約3年間勤めた在ボツワナ日本大使館から1万6千キロほど離れたロサンゼルス総領事館への異動を命じられた。ロサンゼルス総領事館は、在留邦人登録者数が世界最多の約9万5千人、管轄している南カリフォルニアの日系人数は北米最多の約24万人いる。ハリウッドやユニバーサルスタジオなど有名観光地が多く、大谷翔平選手がプレーするメジャーリーグチームもあり、外務省の赴任先としては人気のある場所の一つだ。私はアフリカで2ホストを経験したので、おそらく、「褒美人事」だったと思う。

ここでは総務・政務のほか、日米関係を支えてきた日系人の皆さんとの関係構築を担当した。ロサンゼルスはダウタウン内にある米国最大の日本人街「リトルトーキョー」で暮らす日系人と関わる機会も多かった。中には福島にゆかりのある人たちもおり、私が福島出身だということで大変よくしてもらった。彼らとは今でも交流が続いている。ウガンダ、ボツワナ、ロサンゼルス…。赴

## SNS契機に新天地へ

る「地域創生」と「海外進出」のビジョンに共感し、昨年2月に入社した。

入社後はこれまでの経験を生かし、グローバル戦略本部長として東京都にある各国の大使館を訪れ、AMLの技術売り込みや進出先として私が注目したのがアフリカだ。アフリカは今でも伝統的な雨水に頼った農業をしており、安定的な食料生産が課題となっている。AMLの技術を使えば、アフリカの農業に大きな変革をもたらすことができると考えている。

昨年6月に副社長になり、同年12月から会津南多方工場長・会津南多方支社長も務めている。副社長といっても、農業経験わずか1年の新人。周りはベテランばかりで、勉強の毎日だ。副社長としてのモットーは「自ら働く姿を見せること」。自ら進んで工場で作業をし、時には新品種のレタスの実験も行っている。これからは自ら手を動かす、敷居の低い副社長であり続けたい。

(聞き手 阿部 千翔)



ルワンダのアーネスト・ルウムキョ駐日大使(手前左から2人目)にクリンルームでの野菜の栽培方法を説明する私(手前左)。ルワンダでの工場建設に向けて、昨年7月に南多方市の工場を視察してくれた

## AML 植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 9

「外務省を辞めました。地元福島で農業の会社を起業しようと思います」。昨年1月、交流サイト(SNS)への投稿をきっかけに、現在の道が開けた。

投稿を見たロンドン時代の友人が「会津に植物工場があるから一緒に見に行こう」とコメントをくれた。「最先端の農業を見学したい」と思い、友人についていったが、到着したのは会津若松市の料亭。そこで待ち構えていたのが、AML植物研究所の秋山五郎社長だった。「(仕事を)一緒にやらないか」。突然の誘いに正直驚いた。

友人はAMLの株主で、秋山社長に私のこと話を話したところ、興味を持ってくれたそうだ。AMLは完全密閉型クリンルームで発光ダイオード(LED)を使って栄養価の高い高機能性野菜を水耕栽培する植物工場。AMLの低カリウムレタスの栽培技術は既に6の国と地域で特許を取得し、海外進出を視野に入れていた。「農業で世界を平和にする」という夢を持っていた私は、秋山社長が掲げ

## 平和を考える大事な仲間

ミットを開催する」という共通の目標を持っている。ロシアのウクライナ侵攻などで平和な生活が脅かされる中、福島の子どもと世界の子どもたちをつなぎ、平和について考える機会にしたい。私自身は幼い頃から平和を意識して生活してきたわけではないが、学生時代の一つのきっかけから紛争解決に興味を持った。この経験から、子どもたちに世界で何が起きているかを知ってもらい、気付きのチャンスを提供するところが大切だと感じている。

一方で、私たちが住む日本は本気で「平和か」と考えてもらうことも大事だと考えている。講演会などでよく質問するところがある。「日本では年間3万人が自殺していて、単純計算で10年間で30万人に上る。スリランカでは25年間の紛争で約10万人が犠牲になった。どちらが平和といえるか。正解がない難しい問題だが、みんな必死に平和について考えてくれる。これからは紛争・平和学博士号を持つ一人として、多くの人に平和を考えてもらう活動を続けていきたい。(聞き手 阿部 千翔)

ルワンダの教育を考える会で活動する水通マリールイスさん(手前中央)と私(同右)。福島と世界の子どもたちをつなぎ、平和について考えるためのイベントを開催していき



## AML植物研究所副社長 菅野 直和 (41) 10

帰国してからは本業のほかに、ルワンダの教育を考える会の戦略アドバイザーを務めている。理事長を務める水通マリールイスさんは、私の人生に影響を与えてくれた人物の一人だ。

彼女との出会いは、修士課程時代までさかのぼる。福島県出身で同じ宇都宮大に通っていた友人から「ルワンダの大虐殺を生き抜いて日本に帰化したルワンダ人女性が福島にいる」と紹介されたのが、マリールイスさんだった。私と彼女は「平和」への共通の思いがあり、すぐに意気投合。昨年1月に帰国後、真っ先に彼女に会いに行くこと「アドバイザーになってほしい」と頼まれ、快諾した。

同会ではプロジェクト案を作成したり、イベントで司会を務めたり、査証手続きの支援などを行ったりしている。会の活動を通じてアフリカとのつながりを守ることができ、福島にいなながら国際協力ができることをうれしく思う。

彼女と私は近い将来、福島で子どもも平和サ

## 目標実現 これから本番

これまでの人生を振り返ると、常に自分が輝けそうな場所はどこか考えて選択を繰り返してきた。一見すると「難しい」と思っても、勇気を出して新しい環境に飛び込めば何とかなってきた。それが今の自分の自信につながっている。そこにはすでにみなたちとの出会いや支えもあった。一人で成し遂げられたことなど一つもない。

現在41歳。これまでの40年は人生の序章に過ぎない。尊敬する先輩から言われたが、自分は「大器晩成型」の人間で、これからが本番だ。将来的には大学で紛争解決学を教えたり、世界の課題を解決できる技術を持つ福島企業の海外進出を支援したりすることに興味がある。人生のテーマに掲げる「平和」の実現に向け、今後もさまざまな挑戦を続けていきたい。(聞き手 阿部 千翔)

※25日からは、かまぼこ製造・販売の貴千、専務の小松唯穂さんが登場します。



AML植物研究所で栽培された高機能性野菜を手にする私。AMLの技術を生かして、世界の平和に貢献していきたい

一方、国内では地域創生に向けた活動に力を入れている。現在は会津農林高と連携し、私の人脈を生かしてロサンゼルスで同校の製品の試食会を開催できないか話を進めている。父親が同校の2代前の校長を務めていたという縁もあり、必ず実現させたい事業の一つだ。

## AML植物研究所副社長

## 菅野 直和 (41) 11 完

ロシアのウクライナ侵攻やパレスチナ・イスラエルの紛争など、世界中で平和が揺らいでいる。報道されない人道危機も多くある。世界で相次ぐ紛争を予防するために、自分ができることは何か。その答えは、AML植物研究所の技術を生かした新しい産業で雇用を生み出し、貧困や食料不足といった紛争の火種を起させないようにすることだろう。単なるお金もうけではなく、人や社会、平和に貢献する企業であり続けたい。

入社から約1年間、海外に向けてAMLの技術売り込んできた努力が実を結びつつある。安定的な食料生産が課題になっているアフリカで実証試験用のプロトタイプ植物工場を建設してほしいという話が持ち上がった。実際にルワンダ大使やシブチ大使が喜多方市を訪れて植物工場を視察し、それぞれの国に必要な技術だと確信してくれた。